

震災から2年を迎えて

西野 善一

宮城県立がんセンター研究所
がん疫学・予防研究部 部長

元々地震が多い地域で、いずれ大きな地震が来ることもある程度は覚悟していたのですが、まさか千年に一度ともいわれる震災に遭うとは思ってもよかったです。

発生時は仙台を離れており、何よりも心配したのはスタッフの安否であり、机やキャビネットが室内に所狭しと置かれていた登録室の被害の状況でした。幸い全員無事で、室内もあれだけの揺れに対してキャビネット、机が各1個転倒した程度ですみました。棚の上に置かれているものには滑り止めシートを敷く、キャビネットには転倒防止ストッパーをつける等の耐震対策をとっていたのが役に立ったと思います。

登録室での業務はほどなく再開できましたが、出張採録はしばらく中断せざるを得ませんでした。その後対応可能な施設から随時再開しましたが、閉鎖された沿岸部の2病院では行えなくなり、再開した施設でも中断で生じた収集の遅れを取り戻す途上であって、この点では未だ復旧への取り組みが続いているところです。一方で、福島第一原子力発電所事故による県民の健康影響や不安払拭のための対応策が議論された『宮城県健康影響に関する有識者会議』では不安払拭のための具体的な対応策としてがん登録の整備推進があげられました。これをふまえた整備拡充策として、届出依頼の働きかけを強化し協力医療機関を増やすとともに、震災後に県内外での人口流動が増加したことをふまえて手続を進めた結果、登録患者の追跡に住民基本台帳ネットワークを利用することが可能となって今年度より予後調査に活用する予定にしており復興へ向けた取り組みをすすめています。

このような中であって、五大陸のがん罹患(Cancer Incidence in Five Continents)第10巻に対しデータを提出することができ、第1巻から継続してデータを提出している世界17登録、日本で唯一の登録として国際がん登録協議会(IACR)から昨年表彰を受けたのは大変勇気づけられる出来事でした。最後になりますが、心身ともにハードな2年間を頑張ってきたスタッフに改めて感謝したいと思います。

平成25年度学術奨励賞を受賞して

杉山 裕美

(公財)放射線影響研究所 疫学部
腫瘍組織登録室 室長代理

地域がん登録全国協議会の平成25年度学術奨励賞を受賞し、関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

このたび学術奨励賞をいただくことになった研究テーマは、地域がん登録の収集方式(採録方式・届出方式)によって、その完全性(悉皆性)やデータの質がどのように違うのか、また集計データにどう影響するかを検討することでした。結論として、完全性については、地域診療連携拠点病院の認定、電子カルテシステム、院内がん登録などの医療機関側のシステムが整い、拠点病院からの届出票は十分集まってくる体制が整いつつあり、届出形式でも完全性の高いデータが収集できることがわかりました。しかしながら、データの中身(がんの診断年・部位・組織型・病巣の拡がり)を比較したところ、採録票では、がんの詳細な部位や病理診断名まで把握できているが、届出票では部位は胃や肺といった大きなくくりでの部位までしか反映されていないこと、組織型不明のものが多いことがわかりました。すなわち訓練された採録員が収集したデータの方が、届出票のデータよりもより詳細にデータを収集しており、届出票を記載するにも一定の訓練が必要だということがわかりました。今後、がん登録法が成立すればがん登録の届出が義務化され、どの地域においても、一定の完全性は達成できるでしょう。しかし、届出票を書いていただく医療機関、担当者の方への書き方説明会や研修会等、継続的サポートが必要と考えます。

地域がん登録の仕事に携わって9年になります。放影研での、地域がん登録実務のマネジメント・記述疫学研究と放射線疫学研究の両立は難しく、悩みながらの日々でしたが、がん登録研究班、放影研疫学部、広島県の地域がん登録関係者の皆様に支えられ、続けてこられたこと、このような学術奨励賞をいただき、感謝しております。そして、何よりがん登録業務を支えてくれている、登録室の同僚たちに感謝の気持ちでいっぱいです。奨励賞の副賞金は、作業中の2年分の集約と採録が済んだら、登録室の同僚たちと打ち上げをして、美味しいものをいただきたいと思います。残りは記念に時計を買って、それを見るたびに今後の研究活動の励みにしたいと思っています。